

野菜や花に発生する病気とは、どんな症状を呈するのでしょうか？

葉に斑点や斑紋が現れる、葉が萎れる、株全体が枯れる、茎や葉にカビが生える、果実が腐るなどが一般的な症状です。

農家では発生すると品質や収量にもろに影響するのでその防除は非常に重要です。とくにハウス栽培では多発しやすいので神経を尖らせています。一方、家庭菜園の主である園芸愛好家はどうか？ ほとんどの人は枯れた葉を取り除く、枯れた株は引っっこ抜く、腐った果実は千切って捨てていることと思います。皆さんもきっとそうだと思いますが、これが大正解です。しかし時々切り取った被害葉を畝の間に捨てている人を見かけますが、葉は萎れて枯れても後ほど菌はこっそりと逃げ出して新しい葉に取り付きますので切り取った被害葉や株は必ずポリ袋に入れて畑から連れだしてください。



病気が発生するには3つの要素が重なることが必要です。主人公である植物体、それを攻撃する細菌などの微生物、その微生物が取り付きやすい環境条件の3つです。いくら細菌がたくさんいても繁殖に不向きな条件下では病気は発生しません。

人に置き換えてみると、人間がいて、風邪ウイルスがいて、子どもや老人など抵抗力の弱い人がいて、これで初めて風邪引き患者が発生します。だから健康優良児ばかりでは風邪菌の付け込む隙はありませんし、夏のように気温が高い時期も菌にとっては嫌な時期です。

それゆえ、野菜や花を栽培する場合、菌は何処

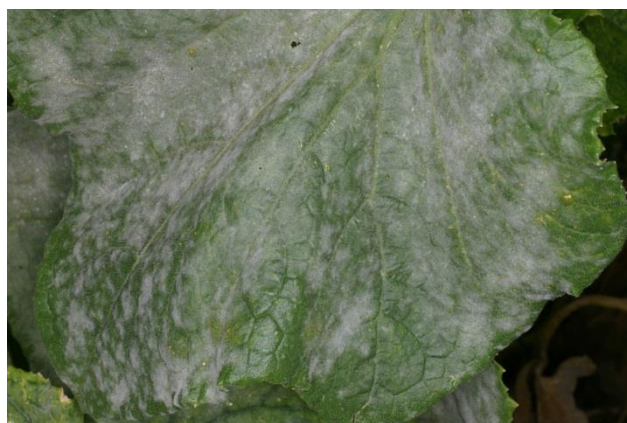
にでもいるものと想定し、風通しをよくする、土壌の水はけをよくする、風雨の悪影響を少なくするなど栽培環境面の工夫が有効です。

害虫防除では、害虫の姿を見てから殺虫剤を散布しますが、病気の場合は、発生する直前、または発生直後の初期防除が基本です。病気が多発してからの防除は非常に難しいです。不可能と言ってもよいくらいです。火事と同じように初期消火が基本です。

葉に斑点や斑紋が発生しはじめたとき、白いカビがぼつぼつと見え始めた時が初期防除の適期で、ダイセン、ダコニール、オーソサイドなどの予防薬を散布します。少し症状が目立つときは治療効果のあるベンレートなどを散布します。被害症状がかなり目立つようになっているときは「時すでに遅し」ですが、被害症状の激しい葉を取り除いた後に治療効果のある薬剤を散布すればなんとか。

なお、薬剤の効果があつて、取り付いている菌が死んでも被害症状は消えません。薬剤の効果があつたかどうかの判定は新しい葉に新たな症状が発生するかどうかです。

白いカビがいっぱい発生するうどんこ病については、うどんこ病専用の薬剤を散布すれば効果抜群で、新たに伸び出す葉には被害症状が表れません。



株全体が萎れて枯れるのは土壌病害といって非常に恐ろしい病気です。そこでは菌が残っていて翌年も発生しますので、栽培する畑を代えるのは予防対策の一つにもなります。